



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	教職員等中央研修（中堅教員研修）の報告（長期研修者報告）(fulltext)
Author(s)	鈴木,誠
Citation	教育と研究 / 東京学芸大学附属世田谷中学校(41): 22-26
Issue Date	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/2309/146630
Publisher	東京学芸大学附属世田谷中学校
Rights	

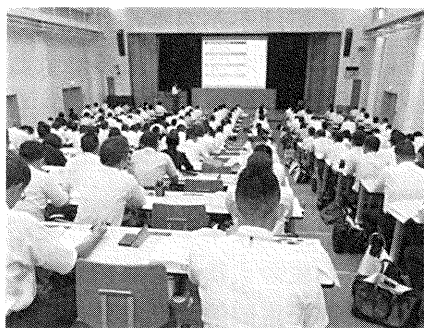
長期研修者報告

教職員等中央研修（中堅教員研修）の報告

数学科 鈴木 誠

1 はじめに

平成27年8月11日～28日の3週間、つくば市にある教員研修センターを会場にして行われたこの研修に参加させていただいた。



研修の目的は、学校の適切な運営、特色ある教育活動の推進のための高度で専門的な知識等を修得することにある。この目的を達成するために、4つの領域「スクールコンプライアンス」「学校組織マネジメント」「リスクマネジメント」「教育指導上の課題」について研修し、総合的な学校経営力を高めることが意図されている。

2 研修内容

(1) スクールコンプライアンス

① 講義

講義では、教育法規についての基礎的な知識を学んだ。大桃敏行

先生（東京大学大学院）からは、地方教育行政制度と法規の関係について、樋口修資先生（明星大教授）からは、学校での教育活動が法規との係わりの中で、どのようなことを遵守する必要があるのかということをお話いただいた。また、弁護士の三ツ角直正先生からは、具体的な事例にもとづいて、事例の中にある問題点について考えたり、その事例に対してどのように行動すべきであったのかということを考える機会を頂いた。

② 学校運営演習

研修前に事前に課題が与えられ、それについてグループの中で議論することによって進められた。そして、議論しまとめたものについて、文科省の講師の方の意見をいただき、見識を高めるというものであった。課題は、学校運営における具体的な内容（例えば校長の権限、研修、懲戒など）について、どのように対処すべきかを考え、それを支える根拠となる法規は何かを検討したり、または、逆に法規から考えるとどのように対処すべきかを考えるもので

あった。

日常の勤務の中で教育法規を意識することはほとんどなくこれまで過ごしてきた。今回の学校運営演習では、自分が与えられた課題は勿論であるが、グループや班のメンバーから話しを聞き、議論する中で、学校で行われている業務の裏にある法規を意識化することができた。日常の学校生活の中では、あまり法律が全面に出てくることはないが、ある場面では意識し、法に照らしてどうかということを確認することも必要であると感じた。そのための素地を今回のこの演習の中で得ることができた。

(2) 学校組織マネジメント

学校組織マネジメントに関する内容としては「学校評価」「教職員のメンタルヘルスマネジメント」「コーチング」「コミュニケーション力」「ミドルリーダーの役割」「戦略づくり」「リーダーとなるために」という内容について、講義や演習を通して学んだ。

学校評価については、講師の先生のお話も勉強になったが、それ以外にも、他校がどのような質問項目で評価を行い、それを学校改善にどのように生かしているのか、また、結果の公表のあり方など参考になることが多くあった。

教職員のメンタルヘルス・マネ

ジメントについては、諸富祥彦先生（明治大教授）から講義をしていただき、演習も行った。内容については、非常に身近な問題であった。学校という職場が人に相談をしにくい環境にあるのではないかという指摘は思い当たるようなこともあり、検討に値するものだと感じた。学級運営、学年運営、教科指導などにおいて互いに援助を求めやすい、相談しやすい、弱音を吐きやすいような環境づくりの大切さについて知ることができた。

コーチングについては、武田明典先生（神田外大教授）から基本的な事柄についてお話をしていた。

コミュニケーション力については、劇作家の竹内一郎先生と音楽座ミュージカルの藤田将範先生ほか7名からお話を伺い、演習も行った。お二人のお話に共通していたこととしては、コミュニケーションでは、言葉によるものと同様、またはそれ以上に言葉によらないコミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）が大切であることを強調されていた。これは私自身が得意ではないことであるので、今後意識していかなければならないことを感じた。顔の表情、声の大きさ、視線、身振り手振り、見た目などについてもコミュニケーションの手段のひとつとして考える必要性について学

ぶことができた。また、コミュニケーションでは受容力（受け取る力）も大切であることを再認識することができた。この仕事をしているとどうしたも、こちらからお願いをしたり、伝えたりということが多くなってしまふ。伝えることよりもまず、耳を傾け聴くことを大切にすることが必要だとあらためて思った。

戦略づくりについては、各自が勤務校における課題をどのように解決するのかということについて演習を通して学んだ。そこでは、加藤崇英先生（茨城大准教授）からSWOT分析について指導していただき、それを実際に用いて分析し、課題解決の方策をグループで探った。

(3) リスクマネジメント

リスクマネジメントについては、リスクマネジメントの基礎知識と危機の未然防止方策について講義と演習を通して学んだ。

① 講義

飯野眞幸先生（高崎経済大講師）からはまず、危機管理とは何かということ学ぶとともに、判例を通して学校の危機をどう防ぐかについて考える時間をいただくとともに、示唆を得ることができた。危機管理で大切なことは、子どものいのちをどう守るかということだということは、当たり前前の

ことであるが、再認識させられることであった。そして、もし危機がおきてしまったら、学校はどうその危機を乗り切るのかということについても具体例を通して学ぶことができた。そして、危機を招かない学校づくりの大切さを実感することもできた。

② 演習

演習では、損保ジャパン日本興亜リスクマネジメント株式会社の方からの講義を受け、その後、ロールプレイングを行った。グループごとに与えられる状況は異なるが、どれも実際に学校で起こり得るような危機であり、それに対してどのように対処し、模擬記者会見を行うというものであった。私のグループは、詳細は省くが、はじめに関する問題が与えられた。グループ内で分担を決めたところ、なぜか私は校長役ということとなり、得がたい経験をさせていただいた。演習を通して、事例の中に学校組織としての問題点に気づき、危機を招かないような学校運営の視点を得るとともに、このような危機を本校に招かないようにしたいということを実感した。

(4) 教育指導上の課題

教育指導上の課題としては「道徳教育」「国際理解教育」「生徒指導」「人権教育」「特別支援教

育」「キャリア教育」「教育と芸術」ということについて学校経営の視点から学んだ。以下、そのいくつかについて報告する。

① 道徳教育

道徳が特別の教科として2019年度から教科化されることになっている。本校では、生活学習の一部として年間指導計画の中に位置づけ、実施してきている。教科化されることが決まった今後どのようにあるべきかを考える時期に来ているのかもしれない。柴原弘志先生（京都産業大教授）から教科化を踏まえたこれからの道徳教育についてのお話を聴くことができた。道徳の授業を通して、人間としての生き方の自覚へとつなげることが大切だということ学んだ。道徳の授業では特定の価値を押し付けるというよりは、心理的葛藤や価値の葛藤がある授業、共感・疑問・気づき・驚きのある授業、子どもたちのなぜ？やどのように？を大切にしたい授業、子どもの経験のふり返しと活かしを大切にしたい授業、多様な感じ方や考え方の交流がある授業になるように教材づくりを進める必要があるということであった。

② 特別支援教育

曾山和彦先生（名城大大学院教授）の講演を通して特別支援教育

について考える機会をいただいた。まず、特別支援教育とは、特別支援に該当する子どもが学校にいるからする、いないからしないというような教育ではないように感じた。例えば、気になる子の理解、学級集団の理解、子どもの自尊感情とソーシャルスキルを育てることが特別支援教育では大切だということであったが、これはどの子にとっても大切なことである。また、情報の伝え方にしても視覚的な情報を利用する、一度にひとつの内容を伝える、肯定的な表現を用いるなどは、これから子どもたちを指導していく上で参考になる事柄であった。

③ キャリア教育

(ア) 講義

藤田晃之先生（筑波大教授）からお話をうかがった。その中で、キャリア教育では4つの力「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」のどれを育てているのかを明確にして行うことが大切であるということを知った。このことに関わって、ねらいを明確にして行うことの大切さについて職場体験活動を例として取り上げてお話をされていた。職場体験は多くの公立学校で行われているが、ねらいが不明確になっていないかという指

摘だった。やる時期が来たからやるとか、ねらいが漠然としていたり、あれもこれもやろうということなどで教員も子どもも忙しさに忙殺され、本来のねらいが達成されないようなことも多いということであった。

キャリア教育は学校の教育活動全体を通して実践することが大切であり、キャリア教育の「断片」を教育活動の中に見いだすことが大切であることを学んだ。各教科の学習、指導方法、生活や学習のルール、これまで行ってきた体験的な学習などの中に「断片」を見つけ、意識化するということを教えられた。また、それらの「断片」をつなぐことを通して、体系的・系統的な指導にしていくことの必要性も強調されていた。

(イ) 演習

演習では各学校のキャリア教育の「全体計画」と「年間指導計画」を見直すということを行った。本校のキャリア教育について考える機会にもなったが、それにも増して同じグループになった全国の学校の様子を聴くことができ

たことは大変有意義であった。職場体験だけではない色々な取り組み、3年間を通した体系的・系統的な指導計画の必要性など多くのことをこの演習を通して知ることができた。

2 おわりに

この夏の3週間の宿泊研修は、行くまではあまり意欲的になることはできないものであった。しかし、実際に参加させていただいた今は、このような機会をいただけたことに感謝している。それは研修を通して多くのことを学ぶことができたこととともに、全国の多くの同年代の先生方と真剣に教育について語り、考えるという得がたい機会となったからである。毎日の教育活動はややもすると時期がきたから実施する、毎年のことだから今年もやろうということになりがちな面もある。今回の研修で得たことをもとにして、本校の校務に当たるとともに、学んだことを活かし、これまでの教育を見直し、よりよい学校づくりにつなげられるように他の教員と協力し今後も取り組んでいきたい。